名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

繪本稲妻表紙

三

~13
183
3

特
於
183
5

昔話稲妻表紙巻之三

江戸　山東京傳編

九　辻堂の危難

かくて山三郎ハ銀杏の前とはなれ生駒山を越て河内の国ふかう入こ東の禁竹林寺ちかきあたりまで迯来りけるふ追人ども明松をふりてたづして近くこおひつきけれバ姫君ふあやまちあるんことをおそれ傍の辻堂のうちふおろしおさめて引返し追人の大勢ふ向合て権戦けるが追人ども山三郎が猛勢ふおそれ秋の木の葉の散ごとく四方ふ乱れて迯去りぬ山三郎今ハ心安しと辻堂ふ立ちてうれバこいのふ銀杏の前ハおりさぞ月の光りふくるれバ堂上の塵のあるふ足のおとあり扨ハ追人ども計ふて我戦ひあふ姫君と

奪去つるを疑ひ姫君を奪ひ
決し刀とりあひて切〳〵腹をつきたそんう〳〵なる折も僕
の麻苧忘身朱を染つゝ走来り此体とそいそぐ〳〵
こゞめ大息つきて不破伴左衛門笹那蟹義藻層三平土子泥
助犬上鴉八等四人の者とゆく〳〵ひ草履打の宿恨をうらみ人たゞく
あて三郎左衛門と打たる子細と涙ぐ〳〵を物語れば山三郎大を怒り
旦怒り旦悲み涙滝のごとくそゝりおちて志ば〳〵詞もいでざりけり
良ありていひけるハ今日ハいろ〳〵悪日ぞあん館の騒動こいひ姫君
と奪ゝ〳〵れ志ゝの〳〵ゝ〳〵ぞ伴左衛門某と打んとて誤りて親人
とおたる支ゝ〳〵ハ某が手と正して親人と打たるも同然なり死も死なれ
ぬ今夜の仕義之一つを姫君をとりもど〳〵て奸臣等を亡し若

君城より立て御家督と〳〵二つをハ伴左衛門等五人の者城打ありて
父の霊前を手向冥途の恨城ゝ寄ゝで忠孝の道全からぞ
今ハ二つも三つも不〳〵ゝ命なるぞやなるみても親人の亡骸城もと免
せめてゆゝの葬ゝせん彼所へ案内せよ麻苧とてとて立出んと
志ゝる所を此辺の百姓等こおゞしく明松城前をたて戸板のうくを
屍とのせ蓑おかけてゆゝげつゝ〳〵れば〳〵しありげなる武士方と
ゝゆるが〳〵むご〳〵志ゝ殺されたるを支よ衣服大小懐中物提物など
その侭ふあれば盗人の仕業ともおゞぼゞ片時もゝく郡司をや〳〵
きあ〳〵ゝ我〳〵くがあやまりをふゝ〳〵め様いそげくと口ぐをいひて来て
ぬ山三郎立よりて此方をふゝひあるる支あれば〳〵その死骸ゝ世ゝとよと
いひつゝ蓑城ゝをとてゝ〳〵ゝ〳〵ば三郎左衛門等ゝ体すくをきざ

まれ。股腹よりて五臓六腑こぼれ出て。鮮血戸板ふるぐれきて。
山三郎ひと目みるよりて悲難の涙ふもせかり地上ふ嘆きたふれ
伏と。麻義百姓等ふむひ此屍ハ當國佐々木殿の臣内ふ三郎左衛門
といふ人なりと。されるハ則その子息なれハ此死骸ハ此方へ送と。
少も汝等が越度ふるる夏ふあらずといひきれハ百姓ども死骸の
衣服の紋所と山三郎が衣服の紋所とおなじく三本傘なる故にて。
さてハ相違あれまじ。と安心し。郡司の前ふ持出よりて。
夏ハ夏なるさんハ我くが仕合なりと納得し。死骸ハ涙にてなりぬ。
かて山三郎あげきてかしらへとるもバ麻義ふ命ふ流水を
汲ませて屍ハ清め後日改葬ものと。
辻堂の板敷ハ高くふけて床の下ハ深く堀屍を埋てもとのごとし

おき。香炉の灰をとりて水を手向本尊の石仏ふむひ南无宝珠
地蔵菩薩悪趣の苦患ハ救ふ。と念じ。ものも涙ハ流まふ
と。此時三郎左衛門がおびたる刀ハ重代の左文字の刀二千五百貫
の折紙つきたる名作なりしが。せめてのものと取出さる懐中物提物と
ともふ麻義ふ持しめ給ればいひるハ弟猿二郎夏仕を辞て
後河内の国ふ住ゆバ一旦彼地ふおんもとへ越ゆべしといふ処へ三郎左衛門が
乗馬のつさんふ馳来る。山三郎が前ふ頭ハたれて涙を流しゐれバ。
山三郎その為体と見て胸ふきづり。汝親人の秘義不ごあり我居
所をたづね来て愁腸の体人ふもまさらしふるまひありて髪亂とき
拠ハ昔のひるハ昔呉の孫堅董卓と戦て利と失ひ馬より落て
草中ふ臥。衆軍分散してその在所とたづね然ふ馬宮中ふ

名古屋山三郎
銀杏の前と扶て
館とおもきてう
姫坂追人ふ
うづれて腹と
きゝんとゝゝと
ちりゞ麻呂
三郎たゝ来つゞ
闇打ふ
ちゝゝる
こゝと
告
ちゝゝと

名古屋山三郎
ちりゞ麻呂

四つ。軍人とみちびき草中ふいろりて。孫堅ハ扶ちゐ〜と同。
汝いそれおもまさしぞとのひければ麻呂も落涙〜畜類も主
人の恩ハそひて。ひくのごとく愁悲ふ人と生れていつでも洪恩ハ
忘ハざんや。件左陽門ハ。たとへ天ふ道ありて登る地ふ門あるとも入
とも其ゲ一念の誠ハ以て尋出し。御本懐ハとげさせやたし〜と。
四の馬の平頂とあでまへ〜。人と畜類のたぐそいあれども。我も汝も
傷輩ふて主君の恩ハ同然なるふ。我ハ汝ふハおこりしぞ。
飢ハとめ。飢たんとて。あるの草をとりて与へ水ひるどしていと
つとけて山三郎幸の父ゲ片刃の此馬。これふ乗じて落ゆんと
いひてひ〜とのれば麻呂あるとの枯枝とひろひて火ふ袋ハ
ちと出し〜。火と點じて明松ぞ〜。前ふ立て生駒山ふ出ゆて名ふ
暗ち峠の難所も四つ。案内ハ左ぞたまへ。綱ハ馬ハ
ちちひいて。河内の國へいそぐ。

(十) 夢幻の落葉

それハさて置ふまし。六字南無右衆門ハ佐〜木の舘の表ふ
〜く。旅商人ふ扮ハ扮し。一荷の荷物ハ担げ。人目をそでそ笠ふ
〜ぐ〜面ハおひひ。大和の國ふいろけるゲ宿ハ。まもおくそて夜ふ
入。顔田部村をとぶ。栢木の森の辺をとち通ふ。木蔭ふ人の
うめく声いと苦しゲふきこえければ。ぶうろ立よと。提灯ハ出ハ
見ふ。はあ。こけこる女の。切ゲ麻子の小袖の裾ハたくかげ。たとこ
ひひ。ひ。げしく打扮たるゲ。黒髪ハふと乱し。数所痛手をおひ鮮
血ふさたうろぐれ。徳利朱ふ染ふ。うぶ〜ふ伏ふ息もたえ〜。

傍ふあり長刀とりて。銀の蛭巻して。梨地ふ倚懸目結の紋をちら
しふ蒔ぬこれ佐々木家の紋なれば。益いぶかり。女房抱き起して顔を
見るに。いとふ月若の乳母栢木なりと。ふむ右京門大ふ驚きたく久
の気をけ薬なりどを与へてさるぐふ介抱なれば。やうく目ひらき。おん
身ハ佐々良三八郎どのふあるぞやといふ。ふむ右京門いとく。おん身ハいう
なる支ふて。ひく痛手とおひ此所ふハたりふれ居るぞそのゆえくかしく
語りとひくこいふ栢木苦しき息ふつき。今宵おん館の騒動なりぐの支
ふく姫君若君のおん命危きふよりて。姫君ハ名護屋山三郎守護し
ておちり行妾ハ若君ふ扶ヤして立のびるふ途中ふて追人の大勢ふ
ふつとまれ。やどく若君ふ奪ふられんと支つるを見命かぎりふ
戦ふりく追人と斬散して。若君の御身差ふく。此まぐハ立落

のびけるが。心ハ矢猛ふふれども。あるこの深手ふ歩行ふるハ
倒れて夢中ふなりて。おん身の介抱ふあるこしも支ども。おん
藤波ふ殺して立のびれし支実ハ若殿放埒の根ふたるに乗
為ふ世ふれしは。おん内方義業ふの消息を始めて知りて
姫君若君ふも。おん身の誠心ふきえあげて折もあるべ飯条をとこ
ひるく此度の大変なり。さりとふくおん身ふあひたるハ。ひで
君の御運尽ざる所ふ妾此深手ふ。ハそもなるハ命なれば何とぞ
おん身若君ふ。ひるあひ再世ふいざしまるせむれしと泣くものがる
うちもいと苦しげふ。おむ石京門委細ふ聞く十分ふ教ふきて若君
ハいかくふおんとぞと問ふて栢木あるふ。ふ月若のおんさとそ
仰天しひるりこおち入て所の名さく栢木の木の雫ときえうせぬ。

めのとめ一味

月若の乳母
柏木若君を
守護して
追人とたゝひて
深手をおふ
おちきゝう

折しも。茂林のうちより。追人の人数。若君の口ふ猿轡ふ
かせ。ふ脇ふかいまさして走り出。四よく佐と良三八郎。汝長谷部雲
六といひ合せ百鱟の巻物ふ奪。藤波を害して逃去たる大罪人。
そみてそえにけたるハ天の矢一すり。若君ふ奪ふるふふ汝を捕れへ。
両の手ふ美食を握ふがゆ。とくく手ふ法をみてゆ。めとうけ
よ。若手むひるどせバ忍若君ふさし殺さとそ返答いふとぶれバ。
ふむ右傷門いそぐく。地上ふひざゐづき。此所ふてお人方の目ふ
かゝ恐しハ某が運命の尽なるいそう手むうハいさもべきいざとく縄ふ
かけられとおひろ。手とほうぬれバ。追人の人数ふちぐふさすがの二八
郎。覚悟の体殊勝なりそ。已ふ縄ふかゝんとなる油断ふ法ふを
主ふ。ふむ右傷門つと立上りて一人と蹴倒ふ。若君と奪ふ

背後ふかゝひ。仁王ごとふ立なるふちよ。形勢なり。追人の人数
ふれふそて敗かれなる口ゆ。さよ。それ打ふれと呼いふ刀夫ふふ人
て斬かけなるふ。ふむ右傷門手ごゝく息杖ふ仕ふなるふ法拔て相むひ
ふふもふく斬なるれバ。追人の大勢敵ふがく。春雨に打ふく胡蝶の
ごとく。才法ふぬめてゞ逃去ふ。ふむ右傷門今ハ心安ふと若君の前ふ
ひざゐ。ほゞ人目法いふひゆゞ。此辺法立のく間ふ。ゞのゐゞふ気ゞ
まゞふハいさんゞ此ふちふおん方法ふのびゞまゞふゞそ月若ふ荷物
のうちふ抱き入柏木ゞ屍ハめふう近き流れふ沈めて水葬ふ。
追人の来ゞ間ふと足法ふやめてゞ走り去丹波法ゞて去りゞ

十一　斷絃の琵琶

ふそも六字南無右傷門ハ若君法救て我家ふ皈ゞ。一間のうちに

ちのバせおきさ娘楓そもふ朝夕心ぶくもちひてかーぼれ權月日を送る
はづ一日若君ふ志ぞし気ぞしさせやんこ。楓ふやーはけていぞふハ
それバ煩ーや月若へ世ふうらびき生れるふ妖鼠の為ふ髪の毛と
ふひ尽され。剃髪の姿とあり。頭ふ似合ぬ振袖の綾の小袖の摸
様さ。やこのたやこの捨小舟薄縹の奴袴も。涙の痕の志ーこあり。
ふ子ぞーしげふ出ふ。ふむ右傷門楓ふ命じて柴の折戸ぶかーこめさせ。
若君と上坐ふと忘て中しはハ狹き一間の坊隠家。さぞ御気づ。
ふ存ぞ。人目ぶもで切坊ふ子ぞ。御先祖とたぶ
切ルバ人王五十九代の帝。宇多天皇の御末ふて佐ニ木成頼公の末
孫と生れさせ玉ひ。あやこの人ふかーぼれて金殿玉楼のうちふ生ニ
玉ひ錦の菌玉の床ふに一点の不足なく。あぶれ風ふとーわろ玉ひ

坊ふ子ふるふ奸臣佞者の為ふ世ぶせぞめられ。めーる貧家ふ志のぞせ
玉ひ粟の飯椽の粥。つづふ坊命ぶ法ぞのーー蕨の坊ぞろ紙ぶとる
夜の物さ。薄着ふて。壁ふ月の燈火ふ。ぞーき坊ふとりふ。ぞーー
ーーさよこいひられバ若君のーふ。汝が忠志過分ふ。我ふハ
いふふるともいとぞれども。唯気づかーきハ父母の坊ふるふ父上ハ御勘
当の子ふるとやひて后いづくいふる所ふ坊ふとやん。母上ハなぞや山三郎ふ
扶られて落玉ひーーぐこれも御在所知れざるは。追人ふ捕れ玉ひも
知ーべーーぞ。ある哀ーの父上や。ちのび涙にむせ
び玉へばかむ右傷門楓も。坊ん心根ふ推量ーーて。ふ扶ぶ志ぞりる。
やーー折ーも外の方ふ人の足音ひびけれバかむ右傷門楓ふ目ぐハーー
玉て若君ぶ一間ふかしさあーぬ体ふて居たぞけり。人の親のこころハ闇ふ

あくまでも。盲目となりし我子を思ひ道に迷ひて杖小笠携へ出でし我家の女房の琵琶法師背に負ひ手を引て四年ぶりにて我家の軒の垣衣の露ふき草踏分て柴折戸ばかりをとくと打たゝけばたそがれ時の体なれば。こはゝとひのけどよそそぐまづこもちのひてうちふへる楓はんや母の声と聞けて。いそぐ〳〵走り出夫婦兄弟四人の者ひさしぶりの對面ハ。たゞひの喜びいふばかりなし。楓ハ盥ハ湯ばかり。母の裏脚草鞋とき足をそゝぐ。楓ハ盥ハ湯ばかり。母のうれしさに堪ずりけりさて礒菜夫ハ。ひいゝとこと同ことあつく。何〳〵語つてえぐらんや。且ハ三文弥夏。幼年ゝれども藝道ハ心ばかりなれ。片時もはなたずしばのづゝ妙ばかり得て師匠沢角

撿校ゑのもたぐひまれなる器用者と賞美〳〵。玉ひ。糸檀の甲の琵琶一面ハ秘曲の免状ばかりそへて。ハ彼が一曲ばかりなるかく〳〵ニハ楓が新もつゝ。ハ古郷が為しく文弥もまさ地ハ姉ばかり〳〵ハ四条儀ハ立師匠ハ老〳〵ハ乞まるゝ下りひとめ。あがれ。ハ右場門ひ〳〵て〳〵喜びをしぶの對面無事の新ゝて安堵ゑつゝ藝道も上達ばしらや。ばしゑゆゝ。さても能生立〳〵みつゝたゞふだりハ丈高うゑりけるぞ。餘念なく文弥が頭ばかり撫ばくゝ。ハ文弥ハ恭〳〵敬手ばつきゝ父上御安体の様子とうかゞひ。ハ堪えぬ。おこゝ〳〵ハ相のぶる。楓ハ〳〵十六才姿まさ〳〵美麗ハ手織木綿の振袖も綾羅ハまぶハ風情ゑるが母のそばハちかくゝ。長〳〵の御在京さぞ苦労とゝ。ハ〳〵あけくれ気ぼひ〳〵せ〳〵が恙なく体ゝ。

月若
六字南無右来ハ
月若とかくまつひ
南無右来ハ妻儀茶
盲児の文弥を見して
京より家ふ
飯り来

いとか
ぶんや

やうく心おちつきてとのひろまるばかりなるく我苦労ゝゝおことが妻妖蛇も今ふきらめよゝ。其方成以て父上ゑ孝行尽さと辛労成さぞゝゝと推量し。わうれて居ても片時も。わとろく妻いふゝゝぞや縫物髪もうく仕おぼえはるよゝ。父上の消息ゑてそく同ゐそうゝろむろせ髪のかつ成つりくゝえまへゝさてもうはくゝうゝくできゝぞ此きるものもおこどが縫ゝゝめつぷるの手ぎへぞ廣き都のうちふさとゝおことが如き娘はまれと。ゑへばいなで妖蛇の妻おもひいぶゝて不便ありこと何ふはけて。も子成おまへ親の心ぞやせゑ。良わとてゑむ右馬門佐木の舘の騒動柏木が忠死の子細若君成かくまひおく妻の始末成語ゝ。きゝゝせけば。礒菜かどろく不慮の御難義いさへゝさゝとて法れば。ゑむ右馬門いゑごいふても。ゑゝゑ妻そちも文弥も久しぶりふて

若君ゑ。ゑへん目ゑゝはるまろれそ。楓成はけて奥の一間ゑのぐゑへせ、くろ木の念珠はるゑゝて。例の念仏とゑゑはゝ。ゑゝゑ時刻成うはゝゝけり。日ゑも漸こめゝて比京下りの古書画の商人いそがしげゑ。ゑゝゑ来て前の日ゑせまゝしつる。金岡が百鹿の繪巻物外ゑ望人いぞきゝゝゑ。唯今價をお決ゝゝるければ望の方へやゝねべゝゝぞいゝ。おゝとやゝんといゝ。ゑむ右馬門打頷てそのゑゝと火急ゑゝ。どゑて三日まちゑゝれゑゝとゝゝば商人頭ど方ふゝ。某も旅ゞけの妻ゑれば三日ゑゝへまゝゝれゑゝさゝゝゝゝば今夜三更の時まゝちゑさえ。その朝がゝとゝゝれば。ゝゝぞちふゑの方へ賣はゝゝへゝゝゝぞゝて。詞成つゝひて立飯ゝ。ゑどゑく外の方ふ人声ゝゝて足音ひゝさければ何妻ゑゝ。内さゝて。捕手の輩組子ども。どやゝと入来ゝ。組子の頭黒星眼平とゝふ

者首桶は小脇にたづさへ声あらゝかにいひけるハ汝佐々良三八郎今の名ハ六字南無右衛門と中々いふよし月若どのはかくまひおく事註進の者ありて大殿のおん耳にいりし首打てまゐれとの厳命なれバ汝自打て渡さばなれや其座に打べきや返答いかにとなじりぬなむ右衛門胸さわがしくこゝろへどもさあらぬ体にて若君はかくまひやせしなんどゝハ何者がさしたるや夢にもしらぬ事なりとそらうそぶきていひければ眼平はらだち打笑ひ汝かくまひおく事明白なり志かもあらがひて此ありか家は踏破つて家さがしせんもし又尋常に首打て渡さバその功により汝が旧悪ハゆるすべし返答により汝もともにからめとりて藤波は殺し巻物を奪たる旧悪をたゞさんとなじりかだしをかけてせめければさすがのなむ右衛門も不とく当惑の体

なりしが魂もきえていひけるハさすがなる事のかくなりしうへハせんかたなしいかにも若君のおん首打て渡しまさんさりながら御最期の念仏をもすゝめ申さんその間しばしの御猶予くださるべしといへバ眼平うちうなづき得心のうへハしばしの間ハまち申さん志からバ今宵三更の時打鐘を號として首うけとるに参らんそれまでかならずと詞たがふなかれそれまでハ村長がもとにまちをらん首桶それへうけとるべしと相渡し人数を引具し出ゆきたり跡にハなむ右衛門手をこまぬき頭をたれて志ばし思案にくれたるが良ありていひけるハ巻物の價百両といふ大金なればとても調べき手段ハなけれど一寸のびれば尋のびるといふ常言もあれバまゝよ思案もあらんと今日翌日といひのべしがそれよりも猶危急なるハ若君の御身なり今宵に

なあり二つの難義卧竜楠氏の智謀あることもの〻道調をべい
あるぞうぞ。藤浪〻所縁の者ゑ打れんこめゆそゑひし命ゐれ
ども。めうきハ是非もゐ。若君ハ貝まわゝせのゞてはけい
のゞれゑそ若ゆゑゑへゞるその時ハ御腹をさゝめゆし斬死をゐり
外ハゐ〜と。ひゐゑゝ心のうちにうゐぼけて。旧葛籠のうちゐ。
一腰ハ取出〜。行灯提て奥の一間ゑ立いゝんと破れ紙門をさと
あゝれバ。盲児の文弥財布のうちゐ。あゐゐゐ小判ハ取ゞ
〜て。手探ゐにゆゑ〻居たゐゞ紙門のゝ音ゑなゞゐた。手ゞゆゝ
背後ゑかゝ〜たゐゝ。ゐゝ右衛門目ゞゆゝゑはけゝ。いゞゐゐゐいひ
けゐへゐふ文弥。ゑれバ餘程の金ハ持たゐゞゐゐゐゐゐゑゑゑ
金持〜ゞゐへ出〜てゑせゐとゐふ文弥いゝゝゝこれハ師匠ゐゐ

あゞゐたる金ゐれバ親人ゐゐゐゐゑゞとゐふゞゑゞかゝ右衛門。
師匠ゐゐゐも幼年の汝ゑ。大金ハあゞけゝゝゞたいゐれゑし。
いゐゐゐゐゑゑあゞゆゆとゝ問れて文弥口ゐゐゐいゆゐれハ途中
あて拾ひ〜金ゐゐ。あゞゆゆとゝハあゐゞゞと詞のあゞさたゐゐゐば。
かゝむ右衛門まゐゝくあゆ〜〜。途中ゑひゐひゐの紙ゞしゐゝハ道
ゑあゝゞゞゆゝゞゝゑ拾ひはゐゞ。實正のゝとゝひゐゞれてせんゞゞゐく。
まゞゝゝ此金あゞゐゐも拾ひもゞゞ。道中の旅店ゑゐゐと合せ旅人の
金ハ盗ゐゐゐはゐゐゑゐ。ゐゐてかゝむ右衛門あれれてゐゐりゝゞび
はゐゝて引たゐ〜。ゐゑとゐゐゞゞゐ。ゐゐまゝとゐ真實ゐ。ゐ来ゐんぢ
孝子ゑゞさあゐ非道とおゐゐゐあゞれ性質ゑあゞゞと。今のいゐ
まゞゞひ〜ゞ在京のゐゞゆゆの間ゑさゞゆり心のかゐゐゐあゐ。これゝく

きけよ。あたらうる所、王法あること。くるに所ハ神、天あると五戒のうち。あつても偸盗とおもふ。たとへ塵一もぢみても盗をかして。豈〳〵罰ハまぬかれんや。げゝ〳〵ハ心底やあさましき所存やこそ。左の手ふるり首ハ持四右のこぶ〻ハふるとあげて。頭ハのそこ。ぼゝけ打ふ打たゝ〳〵。且怒且悲こ。あつた涙ハおとしにく〻ふきびしく。ゆ〻しめ。あ〻ん心もるゝんかと。親の慈非こそ思かれ、文弥ハやゞて越上て。あゞこ〻笑ひていひけるハ。貧乏者の子こうなれ。正直ふりゆ〻てハ。そこも出世ハ。あるとゞ。此金ふて宜ハそれバ一生ハ安楽ゝ。さゞゝ呵ひそと。きけばきくわどふくれバ。歯ハ〻ゝるして声ハあゝらげ。大膽不敵の今のこゝ。さゝ〻〻子こハおもつれゞ。天魔波旬の所行ゝ。親子の恩愛これまでゝ。

七生までの勘當ゞて〻〻ゝ〻もゝで西けこそ足ハあげて蹋こゞ。文弥ハ財布ハ懐中〻。勘當うくれバ親でゆ〻子にあゝれバ長居ハ元益こゞゝ。あたつ。あゝこと探ゝていでこゝ。かむ右衛門怒ふ之のびゞ。走こゝりて又蹋たゝ。あゞこて又悪口こ悪口ゝれバゝ不蹋たゝ〻蹋たゝ〻ゞ益悪口ゝ。かむ右衛門いゝく怒。頭肚の用捨ゝ。踏ゝ〻ゝ〻ふゝたゝ〻ゞ文弥ハ片息ふゝ。あゝも悪口ゞ。かむ右衛門怒気天ふゝのゞ。ハ。ゝゝを接手もこゞゞ。肩尖四五寸きこゝ。呼こ一声たゝ。ぎりて。ゝゝぶ〻ふたつれたゝ。ゝかけてきゝんこゞ〻ぶ恩愛千ゝゞの葛籠の緒。足ふまゝひて背後のゝこひきもどゝ〻こちゝゝ。ゝゝこひきりて又ゝゝあゝ。剣の下ふ妻いゝ業ゝ生。

南無右京つ
怒りふたゝび
一子文弥を
手打よ
きりつくる
六字おしをつ

やれ恐べ〳〵ながら五人のことあんとそぐむれべ。あむち陽門いやそぐむっな
かりく生おりて罪はくぐせんすりん一こひふ手ふかくるぶ。親の
為悲ぐといひつ。いそ菜ば おーのけ。つきのけそ。ふきりつけんと
立きのわ。いそ菜ふ支の手ふとぐそ。その外ばちぐふひきあど息ば
はくく おの金ハ盗物ふいりんぐ。まことハ娘 楓が外の代ふて沙と
いんぐも。ふむ右陽門合点ぐど。妖蛇ふとるれ 化輪ふ娘ば何
ぐふ大金出して めるべき。ふんぢもるいつるとそふ〳〵はく
れべ。いそ菜奥の方ふ寄むりひ。やよく娘ろく来て父上ふおことぐ
心底ものぐくれ。ふやりくとぐふ。ハ娘 楓一声答てかけいぐ。
文弥がきくれ〜 体ば入て。むせのつとてぐたつれる。いそ菜文弥を
抱めんぐ。しうめんが父上ふ本心ばやるうち。ぐへてくれるといく

いうつ。楓ふひひ。ぐ〳〵れいぐべられども。委細のるけを父上にそく
く告ることいそれてやりく新ばあげ。ふむ右陽門ふうちむひ。
御不審ハ理ふり前の日父上ふんものがてたづめる百鱠の
巻物ぐひのけぐ京ぐるの商人持参せしぐ。その商人ば補へ出所と
たぐさべ盗人の在所も忘れ。巻物も手ふ入道理ぐふ。ぐもかるしさハ
日義の外。あ〳〵ふ支ばたじがじ。さるぐそ價ハ百両ぐふ大金るれ
べ。ぐそも我手ふいるどがじ。我手ふいるれべ未代盗賊の汚名ばるく
ぐ支あるべぐ。金ぐくまぐそれまでぐ。ぐ〳〵武士道ばるとて先祖の
名まぐとけがるとぐ。ぐくべく無念ふり。口ぐさるとて男ふきふるき
ぐひ〜ぐ骨ふ忘ぐそいぐ〳〵く何ぐぐ金ぐるのくてあげやんと。ぐ〳〵ど外に仕
りぐも。ぐ幸京都五條坂の傾城屋條村八幡の門前ふ旅宿〜

て居る間ひそかにきゝて此子は百両に買れしをたのもしがりや。さてこそ
やうやうけがらひしが。妖蛇のいのれと聞こその佐破談にかゝる金が延いとこ
その心一図に我子の先輪に心はりさけしき事しきりにおもひなみだにむせびて。そご
くぜんとまろうに捨る神あればたすくる神もありといふ常言の
ごとく今はそちの年ごろなる傾城屋がやとふかいれまで蛇はなひの女
さるぐあつじが實の因果にてさることあるべからずしく殊更生れつきもよけ
ればきし川原にて又それものにせばあそびにさせるよりかへりて利得おほかるべし。
まして又それものになる心あらば五年はかぎり百両にかゝへてやらんといふより。
又そのものはおろかなる生皮をもがれ生膽はとらるゝとも百両の金はそろ
のへ父上の汚名はさへをそゝげば露ばかりもいとふべからずことさら面へさらさ
ずもうき川竹のながれとまで身はけがすとも貞はしなふ諸人にながらと

きはしるばかりにて罪障のきえうせるんことゝもなるならんかと心は決し。
それにきこえてもどりしが父上にいひだしかねて居たるに今日もさぞとも
母さまのおんいりは幸ひとし妾が心底をうちあけさんれご裏口より
ともなひいでかしこに母さまの手形をとゞめて證書は渡し。
百両の金はうけとり今夜のうちに都へ旅立するに約してかへりし
折から捕手の騒動若君の御急難。母さまとものがけを唯おきれ
てとりし不審はなさせまひそこそ。文弥が持しかの金は妾が身の代に
ちがひあるまいと泣かれるにぞ。なむ右衛門の不審なされたれども。
それは文弥が口ぞとて。盗しこともあらといひし血刀はなげさてこそひろく
る。いと菜かへりていひけるは若君の御急難をきくとひとしく文弥を
おんみがかりとやひつきしが。忠義に凝たるかんみあれども。さすがが親

子の愛着まで。もしもかくれあらんと。文弥がいひつくわ父上の気色
欲見望だろうも。なぐめる支度きづひるべば此金ぜ盗ーこいひ悪口せ
べ怒るとふ栗ーて恩愛の紲ぜたち。手打ーあらんハ必定ぞ。ちうぐ
ちうぐふ。ぞ心ぜくもいひきけたれバとやうに同ぞげ某
宿世の因果まで。盲目ぞなりぜ。主君の法大事ぞ。
ぞも戦場のぞぞれるりがく武士の子ぞうもれたるひるぞ。
日来ぞちとくぞひるに若君のおんぞりぞるハ戦場のお
死も同然ねぐふてもるる幸ぞさうるぐたとく計ぞもあれ親
にむひて悪口盗口ぞハ勿体るてしぜぞ。それぐうハ
るぞこいひけるるぞハ最のことるれども。さるてハ父うの愛念と
絶ことあるぞ。何事もうる忠義の為ぞそ。やうく得心させ

けるふ。けるげみもくそのひしぞ。不めけるされぐうるド。それ
ぐどそのうげみて。ぜんぞの様子ぜうぐひしふ。若君ぜ。
るひてのぐれ出。のるハ々時ハきて死ご覚悟の体ふるたれども。
村の口ぐ山道まで捕手の人数かるる居るは同ぞれぞても
のぐるく道ハ通ぞ。きるる首ごるり瞼ぜるるぞ盲目日わぜの差
別もあるし。たぞ眼平若君の地ん彦ぜるく知とも忠義の心ぜ改て
あざむぐやうぐ仕損ーれまじ。大丈夫の地ん彦ぜ恩愛ふひろ
されて。おぐハうるこるふるぜ。愚智ふ女の心といひ朝夕とるれぞ
手ぞるるかけてるれまでふ育めげたるいとし子ぜとるめて殺さと
胸のうち。侍。推量ぐぐされるし。ぞるのるるぞ娘根ぞ。のるれぜ
いひるぐ。ぞの中の親の情ハ我子の片輪ぜごるまでもるくして

ものが常なるふ諸人ふ新成さらさをて丹波の国の恩果娘と
のちくまでもそぢ成殘さと不便さよ妾が身ぞめて十年と若
くば此身成賣ても娘にうき目ハ見せじまのとこどきたてく兄弟
ふたりの手をとりつ夫ふおられ成そくせじこたへまのびはるため涙
瞼の堤をゆきりてめつれおつるぞことりなるかむ右馬門始終と
同じくぶひてるれバ百倍かなしく鉄石のごと成心ふも肝ふやきがもさて
ふくぶひ五臓六腑悩乱しまべ詞もいでざりしがやめるていひるハ
文弥夏若君こ同年こいひ剃髪の姿こいひ新かちも似たる
母ふ坊んがりとふひはなていへしーるぞも何いても盲目ふて用ふたるぞ
と一番ふぶひて死首のまぶ成ふ成盲目めの成のたぞてるき一所
ふハはなぞりも心はなざる抱も容ハとぞれたれども佐輪なれバ

身ふうもるぶぞ嗚呼ふるうめ子ぞもハ持ぶ〳〵親の恩果が子に
報忠義の用ふたぶざる夏ふと殘念ふぶひしがおと成んどめ兄弟の
子どもら。たぶひまれるる心底ふる持べきめの子ぶるこいひて涙と血と
相和して滝のごとく流しけるも文弥ハ母の介抱ふそやりくと起
るおつとおとぶーゆふ手成はたていひるハ渇しても盗泉の水を
飲ぶどこやんをくもの成母ふ人のものハせこいのひるぶ〳〵盗ぬ金成盗ー
こ親をいつる詞の罪ぶんゆるしくぶされし果報はるるくて生れ
もはるめ盲目こるりぬれバ。せめて藝道とるげく父母老後の
心成安め片輪が奴ふ法不便成ふくまひは養育ぶされ大恩と
むくんものこそれたのーふ四年こるこ精神成こせーぶ此夏若君
に一命成たてまつり。姉うも身成賣ふバ此赤ハさぞ心ぶそくぬぶさ

まこと生つれ死つれと兄弟二人ゆつれんぞも。死ハ且は安く生て諸人ゆ面ぬさし父の汚名ぬそぐべんと思ひしゆえの心底い。又ゆしがこれ孝行之此年来学び得し琵琶の一手ぬ父うゆ同せやさで死るのハ心残りゆ思ふ。ゆく手ぬ負て物がたりをくれども。一曲ぬてふまつり申し冥途の旅の土産ぬかたみとゆ思されて。扨同ぐこれし母人さゆそ琵琶をとらゆふぞ。いそ菓法く琵琶をとりてゆくれバ。ワぞゆ年ハ十一才の盲児ゲ。縹木綿の肩あげゆ血ゆ赤たる痂口のいさとをくて琵琶かきゆしいと苦しげゆ声たて。平家をぞかたりける

さるあどゆ。一の谷の軍やぶれしゆ武蔵の国の住人熊谷の次郎直實平家の公達たるけ舩ゆのんとて。ぞぎゆの

かゆ人おちぬれ大将軍ゆ人数ぬとゆ
ゆひ。ゆそ乃ゆかりて。ぞぎゆの人ゆ西ゆ向ける所ゆ。そゆ
ねそ。ぬれゆ雇やゆる直垂ゆ萌黄薫の鎧着て。鍬
形打たる甲の緒を志め。黄金作の太カをゆれ二十四さのゆる
きゆうの矢おひ。頻藤弓りち連錢驄ゆる馬ゆ。金覆
輪の鞍おいてのりける者一騎。沖ゆる舩を目ゆけ海へ
さゆと打へ五六たんぞゆ。おゆがせる
こうたゆ唱哥も声ゆ。ひくてもゆ。ゆくてたしゆゆ。ゆぞさとゆ日
来の手練こいひ此世のなごりとゆふ。苦しゆれ息をぞけまさゆ三
重の甲をあげ。初重の乙ゆ枚て。ゆくひと色たりけれバ大絃ハ嘈
とゆて急雨のごとく。小絃ハ切ゆとして私語のごとく。昭君馬上ゆ志ゆべ

文弥手とおひ実ハ
月若の身代ふきん
見悟と恋とゝう
死出のおにゝやげ
なりとて平家と
かへで
六ようおひ右ゑつ

やうる其色
いとも
ぶんや
いとゑ

楽天客舟に閉るにもさらにまさりて哀なりし。かむ右衛門耳と
そばだて閑居たるが恩愛切なる難のうへにかゝるかなしき調をきけ
ば皮肉もさくるこゝちして。うぶへかけてぞ泣伏たる。礒菜楓もとろ
ともに涙にむせぶばかりなりし文弥はなかれも声ふりたて
熊谷なすごとをなどくとなげいて。あれ御覧候へ。いかにもして
たすけまゐらせんと存候へども味方の軍兵らんのごとく
うちかくて。ども逃しまゐらせ候はじ。かへもおなじう八直実が
手にかけまゐりて。後の御孝養をも御まゐり候はんこそ
なれば只何様にもこうし首をとれとぞのたまひける
ぐへあまりにいとをしくていづくに力を立べしともおぼえず
られ心もきえきえとなれども。前後ふかくにおぼえなれども。さてしもあるべき

ことあるべきならねば。なくなく首をぞかいてげる
フ うたふ声さへたえだえにかすれて。わどくたえん琵琶の緒にかゝる血しほ
の疵口より。さとながるればあな苦しや。あゝやうやうにうたふこともかなひがたし。
これまでぞとて。琵琶ばおかれ跡なきに一条の杖とたよりの暗穴道
死出の旅路は殊更に黒闇地獄に迷ひ行無目の餓鬼と生れ出て
呵責ばかりは必定なりて。それと不便となかせとなる末期の水は
さながら逆縁ながらお手づから香花と手向たなばれし我身のた
めの功徳は他人の千僧供養よりなるかにまさり候べし。さればたゞに
親子は一世のちぎりときくに盲目のかなしさ父上母うへ千万年のお
齢までも冥途へおもむき支ありとも。お嘆れなる事かなはじこなへられ
が三世のわかれ又あふことはあるじこゝばいろでかなしくなされてもおし父うへは

ぞ。ふかとぞといひて。ふむ右衛門ふこうとさとり。ゑう
ちと探りつ。抵まへつ。法苦労ゆゑあるらんかれが足へぞる。
つるくぞ。ひるあるまよ。そくわん文悪ろく。寿長く坐へ。ませこ今般
のきこまで孝心のふる詞をきくみあれ。ふむ右衛門胸ふさぐり。主君の
御先途ゑとぐけて后ハ藤波ゲ縁者ゆたづ。恨この刃ふかりて死を
ぞ。ゆとその覚悟ゑれば。ゑへば蜉蝣の一期ふ。聖をもゑぐこの刃
ゑるふ夫ゑゑとこもゑぐじて長生せ。ゑへとゑのひごとと心ふ
ハゑひるぐ。ロふへゑいゑど過去の修因今生の現果ゆゑ。ゑうける
我ゑみと。のくいひて。ゑく涙ふむ丑びけゑ。礒菜楓友人ハ文弥ゲ左右
ふゑゑとゆゑて。ゑれゲ三世のつゑれゑと声もおゑ。まど注ければ文弥ハ
ふゑゑゲ者ゑうちとさぐりせゑて。その夏ふたゲ一目。ゑん教をゑて死なきこと

ぞ。首目ゑゑゑ。ハ何の因果と又今更に。ゑれくぞきて。血ゆ。ゆくり
泣ゑゲ。折しも空ふ時鳥一声。ゑれて過ゑふゑ。出のゑゑゑゑ
ゑぐく苦痛ゆ。ゑゑりハ。ゑもゑゑ。ゑくくのゑん手にゑゑふゑ。ゑ。ゑ。
ひゑて合掌し。ゑぐく念仏をゑゑ。ゑぐくと催促し。首さ。
て。まちければ。ふむ右衛門子ふちげ。まさられて。ゑゆ起し。刀を接ぎ。
ゑぐゑうゑふ立まへゑゲ。前ふ斬へ。怒の刀今の刀ハ恩愛の功ゑ。
ゑひの剣ゑ。ゑ手も。抖ゑ脚も。軟きて。いぐくふ剣ゆ打じゑ。ゑ。ゑ。
今同ゑる。琵琶の唱哥。熊谷の次郎ハ敵でさへ。敦盛ゆ打ゑ。ゑ。
ゑの。ゆ現在我子ゆ斬ゑ。ゑひ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
時刻ゑ。ゑて仕損ゑ。ゑれゲ忠死も水の泡とおもひきりゑ。ゑ。
足ゆふゑゑ。若我成佛十方世界念仏衆生摂取不捨面死

阿弥陀仏と声もろともにくろーとききれバむざんや首ハ前にまろびおち。
躯ハうしろにたふれたり。礒菜楓ハ太刀音と共にさけびて打ぶれ折しも
遠寺の鐘の声々や三更の時なれバ猶豫なぐざと立よりて彼の金を
そさらに手ばやく躯と葛籠に隠し法仗妻を引起し注て居る処に
あらかじめ此金持て裏口より彼の巻物と買取来れ娘ハ今宵生別ぞ
しもなきをとおしみとぞ鮮血たゞよふ首たづさへ立人をひきそへてつゝ。
なさけその紙門となてきりてその後音もなかりけるが約束の時刻ぞ
己里、星眼平手の者ばかり来て、やゝかむ右衛門若君の首持ちしハ
くとよハび人一間のうちよりかむ右衛門首桶をたづさへて出来りて
あゆミ出老命もじめたくいふにあたらずかん首手に渡し、いざ清点撿と
さしもらせバ眼平ハよく其月若どのをよく見知りたる事へゆへぞ知らる

なんぢなれバよも假首ハつかふまじ。めし又まことにもいつハらバ忽ちなんぢが首
のうへなりとふくミつゝ首桶を引よせて已に蓋をひらんとするに。かむ右衛
門ハ若假首とみあらハさバきり死せんと覚悟して袖の下に刀を抜かけ。
ひかへそのうてひそかにげに危くぞみえたりける眼平蓋をとりのぞきこれ
をおどろく体なりしが。文弥が首の口中より陰気を吐とかむ右衛門が月に
のこへるし。眼平忽眼をくばるも月若どのゝかん首に相違なし。よくおち
ほうびと賞美して首桶をとりおさめ。従者をちかくよびけとまねきの人
数ととくひきとぜしと下知をなしぶらびかむ右衛門にむかひ若君の首
うちたるゝ汝にかゝる咎めひなし旧悪の罪あれども此度の功によりて太殿の
御前よろしくとりなしつかはすべしといひ捨て人数を引つれ立かへる。かむ右
衛門たゞ息と吻とほつてそれまでの人数を引ばやくや気づかふ事なし

若君はおどしょあるべくと交ぜやこころひつ。立上り祈りも妻のそ菓息も
ほれあへどそを飯ひて。様子いふをたづねれば文弥が一念頭ふとりすると。
陰気と吐て。眼平が眼をくぐりもせず十分に欺きこそていそ菓心おち
ほれたかの巻物ところと出してわらとびかむ右衛門ひろたそお家の重
宝ぞ。まだれほしこそて巻おさめ。これさへあれば家もれじが。汚なる名はそき。
末代までもきよめ。これとてふも楓が孝心ふたはるぞ娘ハもとや旅
立しつ。めるを不便やさそ。おもしかるん今ふべ。めれは楓ころりしも。めで
へ墓手の畧訓ぞ。小蛇のたう前表るん文弥が初名は栗太郎と名づけも。
丹波の国の爺打栗爺ぞ打るる因縁ら只此くへ文弥ぞ。菩提とそへが
肝要ぞ。眼平一ぞ假首とそとしたしが。今ふそれとめられてふべ
こそふせ来んハ必定ぞ。片時もそも若君はおどしゃとふとしと

いひて奥ふ入月若の手はたらさて立のがれば若君ハ目は泣ぬ。
夫婦の忠節過分ぞ。便りは文弥が身のそやとあけき
のるふ一言が。ふあるときの千石ぞ夫婦が身ふあるしがく。
かむ右衛門巻物と懐中し。駆とられる菖蒲を。若
君のおん手はられば妻のそ菓ハ琵琶とぐた地水火風の四ツ
の緒のきれ我子のかくそと轉手撥面半月の月の光り
たるふて播磨のかくぞおちぬる
○かくて。かむ右衛門夫婦。若君はは扶て。播磨ぞ河内ふいる
取縁の寺にたるて。文弥が駆と畑とるし。かくの琵琶
と施物こして。仏夏とのるの若君ふのそ菓はつけてめの手
に忍ばせおたそ。ハかの巻物はたづさへ。桂之助銀杏

前の。ゆく〳〵は花ちるつゆ。うそぶくこゑ

巻之三終